ARTKISS LETTER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum,Kumamoto
熊本市現代美術館発行 http://www.camk.or.jp [2008.夏号] vol.38

アラーキー 母子シリーズ撮影会 2008.6.28−29

11月1日(土)より開催されるアラーキーこと、写真家荒木経惟さんの個展の撮り下ろし作品として、2007年以降に生まれた赤ちゃんとお母さんを一緒に撮った写真[母子シリーズ]の撮影会が行われました。撮影会に参加した親子は40組。荒木さんのテンポ良い掛け声に合わせて、赤ちゃんとお母さんが笑顔を向けます。なかには、泣き出しちゃう赤ちゃんもいましたが、撮影は無事に終了。赤ちゃんとお母さんの絆の強さと愛が溢れた写真が、どのような作品となって展示されるのか今から楽しみです。11月1日の開催まで、今しばらくお待ちください！
(A.A)

Museum information

フライデー・ジャム・コンサートがミュージック・ウエーブに生まれ変わりました！！

金曜日の夕方に音楽に耳を傾けながら、美術館でゆったりと過ごしていただきたいという思いから、企画展開催中の第2・4金曜日の6時半から30分「フライデー・ジャム・コンサート」を行ってまいりました。
その「フライデー・ジャム・コンサート」がパワーアップして「ミュージック・ウエーブ」に生まれ変わりました!金曜日の夕方に特定せず、皆様が足を運びやすい日時に設定するなど柔軟に対応しながら、展覧会内容に沿ったプログラムや季節を楽しむコンサートを開催していく予定です。
もちろん、これまでの「フライデー・ジャム・コンサート」通り、引き続きボランティアによる出演者も募集中です。
これからの新しい「ミュージック・ウエーブ」をお楽しみに!(A.A)

ミュージック・ウエーブ No.001
第14回くまもと邦楽コンクールプレイベント　2008.4.12

毎年恒例の、プレ邦楽コンサートが今年も開催されました。
春にふさわしい色鮮やかな着物に身を包んだ演奏者の奏でる音色に、訪れた人たちも春のひとときを満喫していました。(E.Z)

ミュージック・ウエーブ No.002
ボブ・ミルンピアノコンサート　2008.4.13

福岡アメリカン・センターとの共催で、ボブ・ミルンさんによるアメリカン・ラグタイムピアノコンサートを開催しました。アメリカの伝統音楽とも言うべき、ラグタイム。その歴史、曲の解説などのトークを交えながら表情豊かなアメリカを演奏して下さいました。軽快なリズムと穏やかで優しいメロディー、心地よいピアノの音色で会場は心躍る雰囲気に包まれました。(M.O)

ピクニックあるいは回遊展記念トーク「作家に直接、作品への想いを聞く」　2008.4.19

「ピクニックあるいは回遊」展開催初日に、作品を目前に、作家から作品への想いを直接お聞きする「作家に直接、作品の想いを聞く」を行いました。ですので、本展のアーティスト・トークは、会場内を作家さんたちとともに、作品から作品へと移動しながらお話を聞くスタイルで開催しました。当日お話くださいました作家さんは、宮井正樹さん、冨永剛さん、田中みぎわさん、瀧下和之さん、梅田哲也さん、真珠子さん、ミヤザキケンスケさん、倉山裕昭さん、篠塚聖哉さん、武内貴子さん、西野正将さん、田尻幸子さんでした。そのうちから、3人の作家さんのトークを抜粋してご紹介いたします。

冨永剛さんは、4ヶ月に渡っての準備期間で、真黒に日焼けされたとか。設置は大掛かりでボランティアさんの協力の元、竹を編みこんで土を入れ込んだおよそ90×90の木枠を50枠！綺麗に積み上げたところでやっと前半終了。後半はその壁面に漆喰を塗っていく作業をしました。こんなにたくさんの人たちと作品を作り上げていったのは初めて！と嬉しそうに話されていました。(C.T)

倉山裕昭さんは、制作中、床に敷き詰めた鏡をご自身で磨きあげ、線を描くように、丁寧に丁寧に鏡を割ってひびを作っていきました。倉山さんは、この作品をインスタレーションであると同時にドローイング、そして映像でもあるものとして考えているそうです。一つのフォーマットで複数の切り口から表現することを試みられたとのこと。中心の曖昧な多視点的な作品にしたことなどについてのお話もありました。(M.F)

熊本出身のアーティスト篠塚聖哉さんの作品は、大気の流れや湿気をモチーフにして描かれています。一枚につき５色ほどのオイルパステルを使い指で描いており、ところどころに指紋をみることができます。作品のタイトルと画面、また上下に設けられた余白と空間の響きあい。篠塚さんは作品にしかけたさまざまな楽しみ方を語ってくださいました。(M.O)

真珠子歌謡ショー　2008.4.19

「ピクニックあるいは回遊」展オープニング初日のイベント、熊本県出身のアーティスト真珠子さんによるライヴパフォーマンスが行われました。クラシック音楽に歌詞をつけた自作の唄と、巻物を少しずつ引出しながらささやくように語られる様々な物語。ライブペインティングで制作された伸びやかで透明感のある少女の絵。様々なパフォーマンスで、会場を魅了し楽しませてくださいました。あっという間の２時間、ボリューム満点の真珠子歌謡ショーでした。(M.O)

熊本城本丸御殿落成記念イベント 瀧下和之 公開制作　2008.4.20

「ピクニックあるいは回遊」展の関連イベントとして、出品作家の１人である瀧下和之さんの公開制作を美術館の1階のびぷれす広場で行いました。これは熊本城本丸御殿落成記念イベントで、STREET-ART-PLEX KUMAMOTOとの共催で実現したイベントです。2m×7mの巨大屏風に、市民の方々のたくさんの手形を基に出来た石垣に瀧下さんが熊本城を描きこみました。桜色のピンクの手形が舞い降り、まるで屏風の中から飛び出してくるように活き活きとした鬼たちが遊んでいます。完成した作品はピクニック展の会場内に展示しました。(C.T)

桜井武館長出版記念講演会「イギリス風景庭園と現代美術」　2008.4.26

4月より当館の館長に着任した桜井武館長が、展覧会記念講演会を行いました。
講演会では、桜井館長の専門であるイギリス美術を中心に、ロイヤル・キュー・ガーデンやヨークシャー・スカルプチャー・パークなどを例に挙げながら、イギリスの風土や庭園文化を生かした作品の展示方法や作品の在り方について紹介しました。
また、熊本城にヘンリー・ムーアの彫刻を設置したらどう見えるのかなど、興味深い話も繰り広げられました。(A.A)

村井美々 アニメーション制作ワークショップ　2008.4.27

「ピクニックあるいは回遊」展の出品作家の村井美々さんによるワークショップです。15名の参加者は、最初に自分でキャラクターをデザインしました。自由で柔軟な発想が飛び交い、それぞれにオリジナル性を持ったキャラクターが生まれました。制作中はみんな真剣そのもの！休憩時間にもモクモクと作業し続け、2時間後にようやく完成。上映会では、おにぎりが大好きなクマさんや見事な包丁裁きを見せるコックさんの登場に笑い溢れる会場となりました。そして最後は自信作を手に村井さんと笑顔で記念撮影をしました。(C.T)

鈴木淳「似木絵、どうです？」　2008.4.27

北九州在住の作家、鈴木淳さんによるイベントが展示会場内で行われました。このイベントは鈴木さんが参加者の雰囲気や会話から感じ取った印象を木で表現しようというものです。鈴木さんの手によって十人十色の木が描かれ、参加者は意外な自分を発見する機会にもなり、とても楽しく温かな雰囲気のイベントとなりました。出来上がった作品と参加者の写真は会期中会場内に展示されました。(M.O)

CAMKレクチャーカレッジ　冨澤治子「ピクニックあるいは回遊展開催について」　2008.5.5

「ピクニックあるいは回遊」展企画学芸員として、本展についてレクチャーしました。美術館の基本指針として、九州・熊本出身の作家に注目した展覧会を継続的に開催してきており、今回は３回目ということで、九州の若手作家に注目した展覧会としたこと。熊本・九州を離れ、関東・関西で活躍する作家たちの多くが、今回九州という土地で初めての展覧会ということで、作家たちが大いに奮起して参加してくださったこと、作品それぞれにこめられた作家の思いや、展示中の様子など、様々なお話をさせていただきました。(H.T)

鈴木淳「コンサート・巡礼・ツアー」　2008.5.11

晴れやかな五月の空のもと、「コンサート・巡礼・ツアー」が開かれました。案内役は「ピクニックあるいは回遊」展出品作家の鈴木淳さんです。鈴木さんと一緒にまず向かったのは手取天満宮。ついで上通宗岳寺、そして、ショファイユの幼きイエズス修道会内坪井修道院。途中、熊本信愛女学院資料館もお訪ねしました。そこで鈴木さんが取り出したのはオルゴール。狛犬やお地蔵様の足元に置かれたオルゴールの音色に耳を澄ませ、その土地の歴史に思いを馳せます。参加者や訪問先の方々と鈴木さんの対話も弾み、「今でも信仰が続いている場所には何か場のもつ力のようなものや緊張感を感じますね」といった話も。それぞれの場所でその土地の由来なども聞かせていただき、楽しくて充実した「コンサート・巡礼・ツアー」となりました。(M.F)
＊当日の記録写真やオルゴールが、展覧会場内に展示されました。

角孝政ワークショップ「クマムシチョコ/ウミサソリチョコをつくろう」　2008.5.17

この日クマムシのプリントＴシャツ姿で登場した福岡在住の角孝政さん。角さんは、お菓子づくりが好きということで、お手製のクマムシとウミサソリの型を使ったチョコレートづくりのイベントが行われました。参加者の皆さん興味津々のクマムシの話で盛り上がりながらチョコを型に流し込みます。ちょっとしたコツのいる作業に参加者のみなさんは悪戦苦闘していましたが、最後はおいしそうな？！ちょっと不思議でかわいいオリジナルクマムシ&ウミサソリチョコが出来上がりました。型は会期中会場内に展示されました。(M.O)

佐野章二講演会「ビックイシューとアート」　2008.5.18

ビッグイシュー日本代表の佐野章二さんの講演がありました。ビッグイシューとはホームレスの人に仕事を提供し自立を応援する事業で、同名の雑誌を発行しています。佐野さんは、ビッグイシューを立ち上げる時の困難やホームレスの人たちと取り組んだ音楽やダンスの公演についてお話しされました。ホームレスの人の自立のためにアートはとても重要であるそうです。『ビックイシュー』誌には美術や音楽の記事も載っています。社会における「アート」の役割について考えるとても良い機会となりました。(M.F)

CAMKレクチャーカレッジ　芦田彩葵「ピクニックあるいは回遊　制作ドキュメント」　2008.5.24

「ピクニックあるいは回遊」展担当学芸員の芦田彩葵が、「ピクニックあるいは回遊　制作ドキュメント」と題して、出品作品の制作過程についてお話しました。
また、本展の特徴でもある会期中に行われた数々の公開制作やパフォーマンスに触れながら、展覧会場が変容していく様子についてもご紹介いたしました。(A.A)

ミヤザキケンスケ公開作品制作「熊本のカオ」　2008.4.29

青天の気持のいい天気の中、朝10時からミヤザキケンスケさんのライブペインティングが始まりました!作品はびぶれす広場から見える電車通りとアーケード内の賑やかな風景が中心です。前半は御船高校の学生も一緒に描きました。カラフルな色遣いとスピード感ある筆の動きで、熊本城、加藤清正、阿蘇山、辛子レンコン、藤崎八幡宮秋季例大祭など、熊本ならではのモチーフが描き込まれていきます。勢いに乗った画面の変化に、みなさん感心されていました。見ていると元気いっぱいになれる作品です。完成品は「ピクニックあるいは回遊」展に展示しました。(C.T)

ミュージック・ウエーブ №003 CAMK春のピアノコンサートvol.5　2008.5.3

CAMK恒例の企画になった、ピアノボランティアさんによる、「CAMK春のピアノコンサート」が開催されました。
今回は14名のピアニストが参加。クラシックからアニメの主題歌まで幅広い演奏に観客は大満足でした。
「各人発表会のような感じで大変楽しませてもらいました。」
「みなさん一言ずつコメントされて弾かれるのでとても親しみやすかったです。」(アンケートより)(E.Z)

いしいしんじ講演会　2008.5.3

小説家のいしいしんじさんの講演会は、「文学ＤＪ」と名付けられた朗読からはじまりました。色々な本から引用された文章を、朗読にあわせて辿ります。いくつもの文章があるなか、次はどれだろうと探す行為は、いしいさんが文章を書くときの感覚と似ているそうです。
続いて、いしいさんは、その場で小説を考え、紙に記し、読み上げます。すごいスピードで次々と紡ぎだされる物語。まさに小説が生まれる瞬間に立ち会ったのです。しかも、その小説はその場限りのもの。とてもワクワクしました。
会場のお客さんからの「推敲はされないのですか」という問いに対しての「よほどの間違いがない限りしない」とのお答えには、感嘆の声があがりました。いしいさんの天草移住計画(?)発言などもあったりと、軽快でユーモア溢れるお話、お人柄に魅了された二時間でした。(M.F)
＊生原稿「熊」は会期中フリーゾーンに展示されました。

鈴木淳「夢を川に流す会」　2008.5.4

鈴木淳さんのイベントは1時13分発のバスに乗るところから始まりました。行先は熊本城下にある坪井川の水源です。約1時間後、坪井川からは想像つかないほど小さくひっそりとした水源に到着。水面には笹の落ち葉がびっしり！風が吹くと笹の葉の擦れる音が響きます。参加者のご家族はそれぞれに自分の夢を唱えました。「Ｊリーガーになれますように」「熊本の自然がいつまでも続きますように」最後は市内に戻り坪井川のせせらぎを聴きながら、自分の夢が流れてくることを想像しました。こんなに大きな川があの小さな水源から始まっていることを知って、自然の力強さを感じると共に自分たちも頑張るぞーという気持ちにさせる会となりました。(C.T)
＊当日の記録写真が展覧会場内に展示されました。

鈴木淳　「熊本への小さな旅、花岡山へ」　2008.5.25

「ピクニックあるいは回遊」展の出品作家である鈴木淳さんと小さな旅に出ました。
参加者の皆さんと通町筋から市電に乗り、河原町で下車。唐人町を通り、明八橋をながめ、小沢橋を渡り、下馬神社を訪問。そして、地獄坂を登りながら花岡山へ。途中、各スポットで鈴木さんが昔の絵葉書をもとに、移りゆく街のすがたについてお話して下さいました。
参加者の皆さんにとって、目的地の花岡山から見た熊本の街の景色は、いつもと違う情景となって立ち現れたのではないでしょうか。
旅のあいだ、鈴木さんが背負っていた大きなパネルは、花岡山から眼下に広がる熊本の街を写した、古い写真の絵葉書を拡大したもの。題して「熊本を背負う男」。花岡山に向かうまでは、恥ずかしがってパネルを背負いたがらない皆さんでしたが、帰りは、足取りも軽く熊本を背負って下山されました。熊本の歴史と魅力を知る、素敵な旅となりました。(A.A)

名護朝和　染色ワークショップ「手ぬぐいをつくる」　2008.5.31-6.1

1日目。
「ピクニックあるいは回遊」展出品作家の名護朝和さんの染色ワークショップは型紙の図案を考えるところから始まりました。型染の制作方法をお聞きして、どうやったら型染用の図案ができるか皆で試行錯誤の連続です。名護さんがひとりひとり丁寧に説明してくださり、図案が見事完成します。続いて出来上がった図案を型紙に転写、切り抜きます。布の上に型紙を置き、さらにその上から、糊を置きます。糊は餅粉と米ぬかだそうです。なかなか大変な作業でしたが、皆さん本当に熱心に取り組まれていました。名護さんの図案とのコラボレーションを試みられた参加者の方もいらっしゃいました。糊置きの完了とともに、染色ワークショップ1日目は終了しました。(M.F)
2日目。
翌日日曜日。昨日塗った糊はばっちり乾き、いよいよ染色。色を選び、自分で色をつくっていきます。染色用の筆で、着色していきます。みなさん黙って集中タイムでした。染色し終わったらお昼休憩をしながら乾燥を待ちます。
午後からは名護さんにお持ちいただいた「紅型」のＤＶＤを鑑賞。紅型特有の道具がいろいろあっておもしろかったです。るくじゅうというお豆腐を60日間乾燥させてつくられた型を切るための下敷きや、若い女性の髪の毛を使った筆など…。興味深い！余談ですが、るくじゅうは、地球温暖化のため、つくるのは冷蔵庫の中で、となってしまっているそうです。こんなところにも影響が出ているんですね。
いよいよ染料も乾いたので、薬品で化学反応を起こし、色を定着させます。20分間待って、糊を洗い流したら、すてきな模様が浮かび上がってきました。
みなさんご自身の作品の仕上がりに、にこにこされていました。
連続2日間、10時から16時までの長い長いワークショップでしたが、皆さんに楽しんでいただけたようで、スタッフ一同、大変うれしく感じました。とても好評でしたので、改めてまた企画したいと考えております。(H.T)

CAMKオリジナル夏のタペストリーがお披露目されました！　2008.6.7

当館ボランティアCAMKEESの布絵本チームが制作中の「CAMKオリジナル四季のタペストリー」第２弾“夏のタペストリー”がキッズサロンにてお披露目されました。今まで掛かっていた“春のタペストリー”のピンクの淡い雰囲気から一転、爽やかな青い空と梅雨から夏にかけての風物詩が、色とりどりのフェルトや布、ビーズなどで表現されています。このタペストリーは当館フリースペース内のキッズサロンに設置されています。自由に遊べますのでいつでも遊びにきてくださいね。お披露目の後行われた食事会では、もう次の“秋のタペストリー”制作に向けての話で大盛り上がりでした。秋の掛け替えは９月頃になりますので、そちらもお楽しみに！！(S.Y)

ART de GYAN!

[アート・ド・ギャン]
熊本弁で「アート、どう？」の意です。

崇城大学芸術学部デザイン学科コース展 第４週アートクリエーションコース

2008.6.17-6.22　崇城大学ギャラリー
熊本市花畑10-25　TEL323-1158

卒業制作を目前とした生徒さんの作品を中心に、ＯＢの作品も展示。「ピクニックあるいは回遊」展出品作家の西野正将さんも≪New Generation3≫を展示していた。西野さんの作品はのび太の顔がプリントされたタオルに、ドライヤーの熱を吹きかけると、顔が消えて、ちいさなHELPという文字が浮かぶという作品。もうひとりのＯＢの水流陽平さんの≪風の彫刻≫は、木に糸などでペンをくくりつけ、地面にカンバスを置き、空気の流れや風にたゆたわせてドローイングが出来上がる作品。風の音を楽譜にして、サウンドインスタレーションも行っていた。
在学生の作品で興味深かったのは、中崎樹さんの≪ながれるカタチ≫。水流をかたちとして留めようとするもので、蝋引きしたＴシャツを展示している。普遍的なテーマを扱いながら斬新な手法を試みているという点で、今後の展開が楽しみである。(H.T)

養真流　いけばな展

2008.6.20-6.22　崇城大学市民ホール(市民会館)
熊本市桜町1-3　TEL355-5235

「日常身辺の美を探究する」をモットーとする養真流のいけばな展が開催。一昨年のいけばな展では、どくだみの花の可憐さに気付かせてもらったが、今回は、一重のくちなしの楚々とした美しさを再発見させてもらった。花の美しさに目が行きがちな華展の中で、一枚の葉がいかに美しいかを感じさせてくれる養真流の先生方の花に対する姿勢を、今年も強く感じた華展だった。(E.Z)

第27回熊日新人書道展

2008.6.24-6.29　熊本県立美術館本館
熊本市千葉城町2-18　TEL351-8411

熊日主催のこの書道展は、若手の発掘や県書道界の拡大発展を目的に、毎年開催されている。審査は県書道連盟の役員8人が当った。
今年は278点の応募があり、特選15点、準特選70点、秀作95点が選ばれて展示された。
漢字・かな・近代詩文・少字数・篆刻の5部門の作品であった。
各部門ともいろんな書風があり、多彩であり、元気あふれる会場となっていた。特に高校生の臨書作品に力強さやよく練り上げられた作品が多く、見ごたえがあり、将来が期待されるものを感じた。(S.K)

川口かおる　パッチワーク教室キルト展

2008.6.25-6.30　アートスペース大宝堂
熊本市上通5-6　TEL354-2155

川口かおるさん率いる30人の生徒さんと行われたキルト展。月2回の教室での成果がこの展示会で見られる。会場には様々な色の組み合わせを見せるタペストリーで満たされており、まるでお花畑のようだった。川口かおるさんの今回の作品は、グアテマラの織物であるサラッペ(男性用マント、ポンチョ)をパッチワークで表現したもの。「受け継がれてきた伝統あるパターンは素晴らしく、学ぶことが多いんです。」と川口さん。展示会の見どころは初お披露目のペットボトルケースだ。これは生徒さんが一人一つずつ作成したもので、くるりと回した時の布の違いが楽しくとても可愛く仕上がっている。2年に1回のペースで行われているこの展示会、次回はどんな華やかさを見せてくれるのかとても楽しみである。(C.T)

ジュエリーと染織展

2008.6.24-6.29　ギャラリーカフェトト
熊本市上通町5-46上通イーストンビル3F　TEL 096-352-7162

ジュエリー作家の辻本真美さんと、染色作家の大野端代さんによる二人展。辻本さんの作品はシルバー、１８金の彫金をほどこしたものから、自然の色に魅せられて集めたという石を使用したアクセサリーを展示。石の美しさと、身につける人を引き立てるよう工夫された配置の絶妙なバランス、鎖など見えにくい個所へのこだわりなど繊細な心配りが魅力であった。大野さんは、化学染料を用いたダイナミックで鮮やかな染めのパラソルや、スカーフ、タペストリーの作品を展示。鮮烈でかつどこかなつかしい風景をみるようなタペストリー作品は特に印象的であった。実際に身に付けてみるとしっくりと体になじみ、あわせやすく、日々の暮らしの中での用と美の楽しみ方を広げてくれるものであった。各々の良さが引き出された爽やかでかつ存在感のある展示であり、今後の活動に期待したい。(M.O)

田上允克 絵画展 Ordinary Eyes with Immense Power

2008.7.1-7.31　GALLERY KōEN
熊本市上林町1-28-15上通りセンタービル1F奥　TEL 096-323-9118

山口県出身の作家田上允克さんの個展。主に紙にアクリルや、墨、パステルを用いた作品が展示されていた。シュールレアリスティックな油彩によるカンヴァス作品とは趣の異なる軽やかな作品が多かった。
展示されているすべての作品に共通して、タイトルは制作年と数字の組み合わせになっているが、描かれているものは様々だ。ビビッドな色彩で人物を描いた表現主義風の絵から、短い黒の線が画面全体にリズミカルに配置された作品、柔らかな色彩の抽象の絵まで、その幅の広さに驚かされる。同時に、確かなバランス感覚と技量が多様な作風を支えていることもうかがえる。
展示方法も工夫されていた。額装された作品以外にも、いくつもの作品が透明のケースに入れて天井から吊り下げられていた。多作な田上允克さんの作品を展示するために試行錯誤した結果であるそうだ。長崎書店、島田美術館でも同時期に田上允克絵画展が開催されており、それぞれの場所で「各々が惚れた」作品が楽しめるようになっていることも面白い試みだといえる。(M.F)

アーティストがみずからの作品(当館収蔵作品)にコメントをよせるコーナー「レター・フロム・アーティスト」。あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

Letters from Artists

◎第9回／小林稔(こばやし・みのる)さん　(from 日本)
ＮＴＴサイバーソリューション研究所主幹研究員。工学博士。

Ｑ１≪クリア・ボード≫についてお聞かせください。

1990年頃より石井裕さんのラボに加わってコミュニケーション・メディアの研究を始めました。当時から研究所には視線が一致するテレビ電話など、刺激的なものがたくさんありました。そういった環境で、自分がどういうものを作りたいか考えた時に、メディアを通して、動作や身振りなどのしぐさというのはどうも伝えきれない、それって何が問題なのだろう？と考えました。それが、この≪クリア・ボード≫へつながるプロジェクトの始まりとなっていったんです。
例えば、フェイス・トゥ・フェイスの場において、絵を描いてみせたり、それがどういうものかを説明したりする時って、描いたり身振りをしたり、相手の目を見たり色んなことをしますよね。そういうとき、自分と相手のいる空間は、本当はひとつながりになっていて、そういった空間の構造をうまく使いながら、コミュニケーションをしていると考えました。そして、そういう構造は、いわゆる当時のテレビ電話に存在していない、ということに気づいたのです。こういう空間をひとつながりに出来ればいいな、と思ってプロジェクトを進めていきました。
もうひとつきっかけがありました。当時、たまたま先輩が買ったビデオ・プロジェクターが2台、研究所にあったんです。それを使って、空間をひとつなぎにするテレビ電話がうまく作れないかと、小さな実験をいろいろ繰り返しました。しかも実験室じゃなくてなぜか会議室で(笑)。最初に考えたのは、絵などを描いている姿を背後から撮影し、ホワイトボードに表示するというもの。それが究極的には隣に立体画像で浮かび上がるようにすればいいのではないか、という案でした。でもそれは結局、実際には隣に立っているように表示できるわけではないのでうまくいかない。
次に、プロジェクターを活用してL字型のディスプレイを作ることを考えました。垂直な部分に顔や体を映し、水平な部分に一緒に書き込めるテーブルを映し、垂直な部分からつながって手や腕などが映っていれば、自分たちの体と絵を描くところがひとつながりになった空間を表現できるのではないか、と考えました。途中まで作りかけたんですが、たとえば握手しようとしてL字の縦と横の面の間の空間に手を伸ばしても、立体的に腕が浮かび上がるわけではないのでうまく伝わらない。困ったなーと思いました。
そこから何週間か考えて、ふと歩いている時に、要するにL字の縦と横の間の部分がうまくいかないなら、そこを折り畳んで無くしてしまえばいいのかな？と思いついたんですね。腕もスクリーンの向こう側に仕舞ってしまえば立体でなくてもよいし。あれ、これは水森亜土さんのように、ガラスの両面に描くというのに近いな、と気付きました、これでいいじゃないか！と気付いたんです。これが一番このプロジェクトの興奮したところでした。
次は、この発見を技術的にどのように実現するかというところです。解決のヒントは、これも生活のなかから出てきたのですけど、朝、友達と洗面所で並んで歯磨きをしていました。そういう時、相手の顔を鏡越しに見ながら、話したりしますよね。そんな風に話をしながら、あれ？と思ったんです。その時まで、撮影は真正面から撮らなければいけないと思ったんですが、鏡越しに撮っても同じことができるな、と思いついたわけです。これが2番目の面白かったところです。
熊本の≪クリア・ボード≫は、実はとても理想的な光学的設計に基づいて作られています。描いた絵を斜めから撮影するので、カメラが撮影した画像はゆがんでいるのですけども、これがプロジェクターで投影された時にまったく同じゆがみができるようにつくって同じ形の絵がガラスの上に出てくるようになっています。これは実はコンピューターの画像処理で作ることもできるのです。
でもこの作品においては、カメラがあって、プロジェクターがあって、偏光板をつかって、こういう繋がりで出来上がっているんだというのが見てとれるようにつくるのが僕は大事だと思いました。以前に、デモ機を作った時にはいろいろかくして魔法の箱みたいにしたのですが、それは感覚的に違うなと思いました。ここで遊んだ子供たちが、そうかこういう構造なら自分でも作れるかも知れない、と思っていただくことが重要だと考えたからです。
また、絶妙なサイズで作られています。最初に作った91年頃の装置は今と同じくらいの大きさでした。その後、このシステムをコンピューターで作れば、小さいサイズのものも作れると思い、作ってみました。小さい方がといろんなところで使えていいなと思ったからです。でもやっぱり後でだめだな、と思った理由が、そのサイズが問題だったんです。
先ほどからお話しに出ている、相手とのひとつながりで繋がっているという感覚というのはいくつか条件があって、まずは実物大に感じることが大事ですね。あともうひとつとても大事なのが、体が全部映っていることなんです。小さいサイズのでは、手と顔だけが映って、それがどういう距離関係にあるのかが伝わらない。距離関係が伝わらないと、顔や目の向きがわかってもその意味がわからないんです。画面に映っている顔とペンで描いている手の関係が直観的に理解できるには、体全体が映るそれなりの大きさのスクリーンが必要なようで、それが実はこの作品の重要な「ミソ」だったんです。
最初に作った当時は、それが「ミソ」とは思わずに、直感で偶然に決めた大きさで作ったんです。小さいのを作って経験した違和感によって、そういう相手との距離感が伝わることによって、会話をする時の間合いが伝わるようになって、一緒に絵を描くアクティビティーが面白いものになることに気付きました。
自分や相手の表情やジェスチャー、描いている動きって面白いじゃないですか、そういったことが自由自在にできる空間をつくったというのが、この≪クリア・ボード≫のかたちなんです。
プロジェクトの最初の段階で持っていた、目線があわない、ジェスチャーが伝わらないという問題意識が、≪クリア・ボード≫を通じて、体の間合いや間の空気のようなものが伝わることが大事なんだと感じるようになったのは、私にとってとても大きな発見でした。
また、こういう作品を通じて、ああそうか、みんな同じように楽しいと感じるんだなと思うことは、私のような仕事をしている人にとって、とても大事なんです。誰にも言えないけど、少しだけ自信ないなと思っている時に、小さい子が来て、作品に触れて、わっと驚いて、きゃきゃっと笑った姿を見ると、スタッフは裏でガッツポーズを作って喜んでいます(笑)。あ、これでいいんだ、と思った時は、同じ方向に進むとしても、発揮できる力の大きさが違います。力を与えてもらうんだなと思っています。ですので、≪クリア・ボード≫のように、沢山のひとの目に触れていくっていうのはとてもうれしいことで、大事なことなんです。

Ｑ２読者の方にメッセージをお願いします。

コミュニケーションのためのメディア作りに長く取り組んでいますが、ひとはどうして話をするのか？、何かを伝えたいのか、何かを受け取りたいのか、いやいや実はそんなことじゃなくて、話しながら自分で考えて何か発見したいのか？、そんなことをいろいろ考えています。
絵を描くというのは、大事なかたちであると思います。テニスや卓球をするのと同じくそれは面白いですよね。自分のもやもやっとした気持ちや考えを表現として出すことができるとなれば、その通信メディアとしての質も高められるのではないか、と思います。色々な活動で大事なのは、それが面白くて、気持ちよくて、もっともっとやりたいと思うから、続けて出来ることだと思います。そういう気持ち良い、楽しいと思えるメディアの性質を解明したい、見極めたいと思います。そして、そういう仕組みを作りたいと思います。それが工学的・科学的欲求としてあります。でも実際には、そんな仕組みはないかもしれない、と不安になることも多いんです。でも、こういう研究をずっとやっていると、いろんな刺激を常に受けて、人間特有のひらめきができるだけ多く起こる環境を自分に与えながら、出来ることをやっていくしかないなと、思うようになってきました。
自分の、今、何か掴みかけているなという、もやもやっとしたものをかたちにできるように、いろいろなトライを骨身惜しまずやるっていうことしかないな、といつも思っています。そしてそれは、すべての人間の活動に当てはまると思います。

Ｑ３新作はどこで見ることができますか。もしくは今後の展示のスケジュールをお教えください。

最近は、プロジェクトのリーダーをしているので、私の作品というより、プロジェクトの作品をご紹介します。
新宿のＩＣＣで、石井陽子さんが中心になって作った「情報を降らせるインタフェース」を展示しています。手を差し出すと、手のひらに映像が映るもので、映像を組み合わせると色々なものが出てきます。また、今年のアルス・エレクトロニカでは、同じ技術をもとに、石井陽子さんと短歌作家の穂村弘さんのコラボレーションでつくった「It's fire, you can touch it」という作品を展示する予定です。穂村さんの短歌のイメージを手のひらに舞い降りる映像で表現した作品です。トヨタ自動車のショールームのディスプレイでは、この技術が製品になったものを使っていただいています。
これの面白いところは、手のひらにあるのは映像なのに、それを手のひらに受け止めた人が温かく感じたりくすぐったく感じたりすることです。そんな体験を、これらの会場で試してみていただければ幸いです。

≪クリアボード≫2003年
コンピューター、プロジェクターその他　熊本市現代美術館蔵

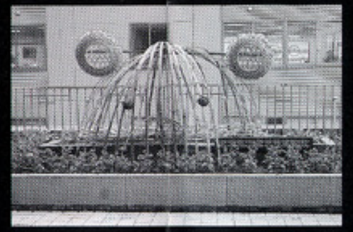
お　知　ら　せ

館内無料ゾーン展示替えしました

当館の無料ゾーンの作品の展示替えを行い、１５点の作品をご紹介しております。館内の雰囲気がガラリと変わりましたので、いつもご利用いただいている方にも新鮮な気分を味わっていただけるかもしれません。収集後、初出品の作品は、横尾忠則≪毛皮のマリー≫と田淵安一≪インディアン・サマーⅡ≫、梅本妙子≪二つの太陽≫の３点です。
(H.T)

日比野克彦　明後日朝顔プロジェクト２００８熊本始動！

2008年4月16日、明後日新聞社社主の日比野克彦氏より、公式参加認定書を受けたのをきっかけに、今年も明後日朝顔プロジェクトに参加し、明後日朝顔の育成に取り組むことになりました。
今年の4月6日まで開催していた「日比野克彦 HIGO BY HIBINO展」のプレイベントとして参加した同プロジェクトは、2003年、越後妻有アートトリエンナーレの時に新潟県の蒲平(あざみひら)で始まりました。日比野氏の開局した明後日新聞社が位置する集落(蒲平)の人との交流のツールとして育てられた明後日朝顔の種の歩みは、すでに5年の月日が経っており、現在では全国津々浦々17地域にまで広がっています。
今年、熊本市内では当館と河原町商屋街の2か所で展開していきます。HIGO BY HIBINOにて日比野氏と交流をもった河原町では、6月7日に行われたアートの日(毎月1回開催されています)で一般の来場者を交え苗植替えが行われました。
庭の無い当館は、今年、正面玄関横に位置する「命の花壇」で、熊本県立養護学校の植える花と同居して、育成することにしました。しかし、朝顔の長く伸びる蔓の伸び場となる縄を張れるような場所がなく、考えあぐねた結果、苦肉の策により竹で一工夫入れ、当館のキャラクターであるキャンくまの顔半分のドームを花壇の中に作ることにしました。竹で制作することになったため、まずは制作方法の相談に熊本県伝統工芸館を訪ね、今回の制作に多大なご協力頂くことになる竹籠制作者の方をご紹介していただきました。
去る6月17日(火)に、花壇に竹を組みました。伝統工芸館のボランティアさんである市原さんと江藤さん、そして竹籠職人の藤谷さんにご協力いただき、9寸の竹から切りだした太めのひごをドーム型に組み、クマの耳の部分となる竹籠を付けてクマの輪郭が完成。それに、石工ボランティアさんのアイディアによるかずらの目と鼻を付けて、見事にキャンくまの顔半分が土の上に出現しました。
その後、石工さんと共にクマの周りと策の手前に100株の苗を植えて、明後日朝顔は無事に美術館の土に根を下ろす準備がなされました。
石工ボランティアさんのアイディアがパーツになり、竹細工の得意な伝統工芸館のボランティアさんの手によって作られた竹のキャンくまドームには、朝顔の蔓が梅雨の恵みにより空へ向かってぐんぐんと伸びています。蝉が鳴くころには、キャンくまが顔に花を咲かせて皆様をお出迎えする予定です。
(M.H)



Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

◇ピクニックあるいは回遊展

・若者が今何を考え、どう行動しようとしているのか知りたくて。(60歳、女性、熊本市内)
・塔本シスコさんの作品に感動しました。どこにあるのかわからない作品があり、地図みたいなものがあればと思いましたが、エレベーターの作品(田尻幸子さんの作品)を発見したときのビックリが楽しく、それで地図がないのかなとか勝手に思いました。(35歳、男性、熊本市内)
・バラバラのイメージをピクニックでストーリー化するのはおもしろかったと思います。内容自体はとても良かったですので、美術館自体のこれでもかという位のイメージ戦略に期待します。(32歳、男性、熊本市内)
・見るだけじゃなく、遊ぶことができて、退屈しない展覧会だと思った。D.B様(ミヤザキケンスケさんの作品)は小さい子も楽しめていいと思った。(16歳、女性、熊本市内)
・意外なとり合せでおもしろく体験しました。(47歳、男性、高知県)
・私個人としての「いやし」となりました。(55歳、男性、熊本市内)
・こういうものがあるから世の中は面白い、という印象を感じた。(31歳、男性、福岡県)
・今回、なんだかとても心に響く作品が多かったです。立ちどまり、何度も何度も見ては、心に響くものを感じることのできた作品でした。特に鬼の絵(熊本城)(瀧下和之さんの作品)は、私はとっても気に入りました。愛嬌とひとつひとつの丁寧さ、欲しいと思える程のものでした。鎖の部屋も(倉山裕昭さんの作品)！！(30歳、女性、熊本市内)
・館内だけではなく、屋外に出ての企画等が工夫されていて、体でも体験できるので、画期的だなあと思います。これからも、あきさせない展覧会を企画してほしいです。(43歳、男性、熊本市内)

編集後記

新年度より3人の学芸嘱託スタッフさんが新しくCAMKで働きはじめていますが、今回、彼女たちは美術館活動をご報告する原稿やギャラリー取材に初挑戦しています。
美術館入口で皆様をお迎えする明後日朝顔の蔓も、豊かな雨の恵みを受け、ぐんぐん成長をはじめています。いよいよ夏を迎え、湿気も日差しも日に日に増しているところがありますが、夏の企画展「メモリアーまなざしの軌跡」も始まりました。涼しく落ち着いた美術館にぜひご来館ください。

編集長　冨澤治子

この４月からＣＡＭＫスタッフとなりアートキッスレターの担当をさせていただくことになりました。編集作業を通して、アートキッスレターという言葉の意味が私の中で深みを増してくる今日この頃。多くの方に美術館とアートをより身近に感じてもらえるようがんばっていきたいと思います！よろしくお願いいたします！

担当　大岩みゆき

●執筆者一覧　＊ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山
Syozan Kaneshiro（書道家）
森山淡草
Tanso Moriyama（書道家）
本田代志子
Yoshiko Honda(熊本市現代美術館主任学芸員)
麓座江美
Emi Zoza(熊本市現代美術館学芸員)
冨澤治子
Haruko Tomisawa(熊本市現代美術館学芸員)
坂本晶子
Akiko Sakomoto(熊本市現代美術館学芸員)
声田彩葵
Aki Ashida(熊本市現代美術館学芸員)
伊豆菜々
Nana Izu(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
矢加部　咲
Saki Yakabe(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
大岩みゆき
Miyuki Oiwa(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
藤本真帆
Maho Fujimoto(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
高橋知江
Chie Takahashi(熊本市現代美術館学芸アシスタント)
橋本真紀子
Makiko Hashimoto(熊本市現代美術館主事)

●発行元／ART KISS LETTER　アート･キッス･レター Vol.38
2008年8月発行(夏号)　◎無料◎
●発行人／桜井　武　編集長／冨澤　治子　担当／大岩みゆき
●デザイン／(有)松永　壮デザイン事務所　●印刷／コロニー印刷
●発行／熊本市現代美術館　〒860-0845　熊本市上通2-3
TEL.096-278-7500　FAX.096-359-7892